■ 編集だより

編集後記

「石を拾うことはあっても玉を捨てることなかれ」

とは，論文査読の鉄則であろう．論文を投稿するほうも必死ならば，審査する側も必死でなければならない．とはいえ，至高の玉が投じられたときに同時代人には受け取り難いという事態が生じるのは，なにも芸術の世界に限らないことで，サイエンスにも共通であろう．サイエンスに基礎を置くアートであるべき臨床医学，とりわけ人間本来の複雑性と多義性を尊重すべき精神医学においてはいかがであろうか．論文査読を厳密科学の尺度だけに頼って進めるならば，誤って玉を捨てるリスクがつきまとう．

本誌114年の歴史の中に燦然と輝く論文は数多あるが，会員各位の胸のうちにある珠玉編は，またそれぞれであろう．例えば私には，原田憲一「症状精神病の症候学への一寄与―「軽い意識混濁」について―」（69巻，1967年），笠原嘉・木村敏「うつ状態の臨床的分類に関する研究」（77巻，1975年）などがすぐに浮かぶ．これらの玉稿が世に出るにあたっては編集委員の力量はおそらく問われない（問われる必要がない）．他方，本誌上の大変有名な論文で，著者自身が掲載の経緯を述懐し，一人の編集委員の論文誕生への寄与が明らかにされているものがある．神田橋條治・荒木冨士夫「自閉の利用―精神分裂病者への助力の試み―」（78巻，1976年）である．私は卒後1年目に，医局の先輩が新人向け勉強会の教材として紹介したことで，この論文を知った．右も左もわからない当時でもその衝撃は大きなものであった．「神田橋條治著作集　発想の航跡」（岩崎学術出版社，1988年）において，「自閉の利用」論文に関する著者の「追想」が次のように述べられている．

「当時，精神神経学雑誌の編集委員をしておられた石川義博先生が博多にこられ，わたくしどもの研究室を訪ねてくださったことから，この論文は生まれた．よもやま話のなかで，分裂病治療についての私たちの試みをお話ししたところ，先生は興味を持たれ，ぜひ精神神経学雑誌に出すように，依頼原稿の扱いにするからと言われた．政治向きのことに明け暮れているように見える当時の学会に嫌気がさしていたし，言いたいことは言う，という当時の風潮に汚染されていたので，没になってもともと，という意気込みで，言いたい放題の原稿をかなり短期間にまとめた．なんなく受理され，掲載料も免除されたのは嬉しかった．昨今のように学会が正常化すると，とてもこのような，論文の体裁も整えていない行儀の悪い文章は採用して貰えないはずである．短い動乱期の混乱がわたくしたちに幸いした」

「追想」はさらに続き，論文発表後の反響などが興味深く記されている．こうしてみると，編集委員の慧眼と行動力がなければ，「自閉の利用」論文は世に出なかったか，出ても遅れて本誌以外の場で公表されたかもしれない．

編集委員の仕事は徹頭徹尾，裏方である．日々つくり営まれる殿堂に，彼我の別なく寄与することの喜びを理解していなければ，多忙な日常業務の中で編集作業にかかる労力を肯定することは困難である．当編集委員会では，インターネットを使ってポンポンと外部に論文査読を依頼するような方式はとらず，基本的に編集委員自身が査読者を務める．1つの論文に対して複数の委員が査読を行い，委員会で審査結果を口述し合うといった伝統的形式を維持している．査読内容を他の委員に査読されるような構造で，委員会はさぞかし厳しい空気かと言えば，さにあらず．実際はゆとりある建設的な空気が委員会全体に満ちている．新参委員の私にもすぐにそれが感じられたことを会員の皆様にお伝えし，今号の編集後記としたい．

布村　明彦